カウンセラーだより

塚崎　悦子

CAMPUS 2007 AUTUMN号
発行日 2007.11.1

人もつ尊い物語

私は、医療機関でも勤務しており、認知症の高齢者の方とかかわりを持つことがあるのですが、最近興味深いなぁと思うことがあります。物忘れが顕著であったり自分の置かれた状況を把握することが難しくなっておられる方で、現在と以前の記憶が混在してしまっているような状態でも、言葉のやりとりをしていると、いかにもその人らしい話しぶりであったり、その方にとって大切な方が出てきたりといったパターンがあったりするのです。「色々やってみたらいい。でも困ったら俺のところに来たらいい」といった面倒見のよい話をしてくれる方やご家族のことをよく気にかけておられる方、子どもの頃の思い出を語る方など様々おられますが、真実かどうかは分からない部分がありながらも、それぞれの方が長い人生の中でその方にとって大切なテーマや物語をいくつか持たれておられるのだなぁとしみじみ感じいってしまいます。

映画にもなった「博士の愛した数式」の作家小川洋子氏が、“小説を書き続けてきて最近思うのは、物語は本の中だけにあるのではなく、日常生活の中、人生の中にいくらでもあるのではないかと思う”と述べていますが、人は生きていく中で現実をそのまま受け止めるだけでなく、時には自分が受け止めやすい形に変えていることがあると思います。例えば、人や動物、または絵画や本といった作品との偶然の出会いを人生の流れの中で意味づけをしているといったことがあるのではないでしょうか。また、困難な出来事に出会うと現実を自分に受け入れやすい形にして記憶に留めるといったこともあるかもしれません。これは、人間のもつ生きていくための力でもあるようにも思えます。

ちょっと伝わりにくい例かもしれませんが、私が中学生の時の出来事です。朝の部活に行くため急いで自転車を走らせていて、いわゆる飛び出しをしてしまった為、横から来たバイクの方がとっさに避けようと横転して肋骨を骨折してしまったということがありました。接触をしていない為事故としても処理されなかったのですが、謝罪するだけではおそらく自分の罪悪感をぬぐうことはできなかったのでしょう。私はこの出来事が、直接自分が関わらなくても知らず知らずのうちに人を傷つけてしまうこともあるんだということを気づかせてくれているように思え、大切な出来事として受け止めるようになりました。

例え同じ現実があったとしても、どのようにして現実を受け止め、記憶として残っていくかは人によって全く異なるものであると思います。カウンセラーとしてお会いしていく中では、相手の方の持たれている大切な物語を通して、少しでもその人らしさの理解に近づけたらいいなぁと思いながら日々お話を聞かせて頂いています。

【引用図書】
小川洋子　2007　『物語の役割』
ちくまプリマー新書